

Leonora Sansay, *Secret History; or, The Horrors of St. Domingo* にみる
大陸アメリカ性とクレオールの無意識

庄司 宏子

序

1808年にフィラデルフィアで出版された Leonora Sansay の書簡体小説 *Secret History; or, The Horrors of St. Domingo* は、1802年にサン＝ドマングに渡ったフィラデルフィア出身の Mary と Clara のアメリカ人姉妹が体験した黒人奴隷の蜂起によるハイチ革命のさなかにあるカリブ海フランス植民地の社会を描く。姉妹がサン＝ドマング北部の大西洋に面した町 Cape François (Le Cap、または the Cape とも記される) に到着した日は、Toussaint Louverture が拘束された日であり、町は喜びに沸いている。黒人将軍による支配の後、ケープ・フランソワはナポレオンの義弟 General Le Clerc (Charles Victor Emmanuel Leclerc のこと) とそのフランス軍の統治下におかれる。この地でメアリーは、「たくさんの綺麗なもの、パリからの新しいファッションやエレガントな装飾品」など「目にする新奇なものに魅せられ、上機嫌で」過ごす (65)。しかし、メアリーはすぐさま「この土地の人々」のルクレール将軍に対する非難の囁き声——「あまりに黒人を信用しすぎている」——を耳にするようになる (65)。土地の人々、すなわちクレオールたちは口々に今に悪いことが起こるだろうと予感する。サン＝ドマングの気候に慣れ、黒人との戦い方にも通じているクレオールたちは将軍に忠言するが、将軍は聞く耳を持たない。そして当地の高位の職や利益は「ヨーロッパ人」に牛耳られていた。ヨーロッパ人たちはこの島を征服し、分割することしか考えず、クレオールたちはそういう彼らを「嫉妬のまなざし」で見ていた (66)。このように物語の冒頭から、アメリカ人メアリーが見たサン＝ドマングは、人種と出生地により三つの階層——「ヨーロッパ人」(the French)、「クレオール」(white Creoles)、「黒人 (The Negroes)」——に分断され、その分断の狭間に競争、収奪、誘惑といった帝国と植民地との関係から生じる利害と感情の物語が蠢く。¹ こうした奴隷反乱を背景とするサン＝ドマングを舞台に、帝

1 サンセイの小説ではこの三つのカテゴリー以外にサン＝ドマングにおいて重要な

国と植民地との間のエコノミーとエロスの不均衡な欲望と力が循環する状況にアメリカ人のメアリーとクレアラはどのように参与するのであろうか。本稿では、出生地と人種により分断されたサン＝ドマングにあって、メアリーとクレアラがいかなる「アメリカ性」を構築するのかについて焦点を当てたい。さらに小説は二人のアメリカ女性の個人的な自己形成に留まらない国家的な枠組みも持っている。小説は三十二通の手紙から構成される書簡体小説の体裁をとるが、メアリーとクレアラとの間で交わされる五通の手紙を除く二十七通はメアリーが故郷に書き送った手紙であり、その手紙の受け手は Aaron Burr とされているからである。小説の一義的読者をバーとし、彼の存在を小説の言説に組み込むことは、この小説の言説空間をサン＝ドマングと姉妹の出身地のフィラデルフィアを超えて、バーの野心の地である西部テリトリーをも射程に入れた環カリブ海地域へと拡大する。²

1803年、ジェファソン大統領時代にアメリカは、ナポレオンのフランスから1千五百ドルで広大な仏領ルイジアナの地を獲得する。ナポレオンにルイジアナ売却を決断させたのは、彼が派遣したルクラク將軍によるサン＝ドマング制圧の失敗により、新世界に帝国を築くための足場を失ったことによる。そしてジェファソンのアメリカが獲得した新しい西部テリトリーに自分の帝国を築こうとしたバーの陰謀（反逆罪に問われたバーは小説が出版された1808年には無罪判決を受けイギリスに逃れていた）、そのバーに語りかけるメアリーの手紙によって構成されるレオノーラ・サンセイの小説は、カリブ海のサン＝ドマングとアメリカ東部（フィラデルフィア、ニューヨーク）、

カテゴリーであった“gens de couleur” (free people of color) は登場せず、“mulatto”についてもあまり描かれてはいない。

- 2 「故郷への手紙 (letters home)」を典型的な“nostalgic discourse”であるとし、そのイデオロギー性を論じたものとしては、Rosaldo 82-83を参照。手紙の受け手が Burr であることは、小説中に言及されることはなく、小説のオリジナルタイトル *Secret History; Or, The Horrors of St. Domingo, in A Series of Letters, Written by a Lady at Cape Francois, to Colonel Burr; Late Vice-President of the United States, Principally During the Command of General Rochambeau* でのみ明らかとなる。Leonora Sansay と Aaron Burr との関わりの伝記については Drexler 及び Lapsansky を参照。

そしてアメリカの新しい国土の西部テリトリーを繋ぐ線を浮かび上がらせる。小説に現れたこの三つの地点を結ぶ線は、ジェファソン時代のアメリカをカリブから捉え直すという批評的な関心と呼び込む。

サン＝ドマング出身のフレンチ・クレオールでプランターである St. Louis と結婚したクレアラ、クレアラに伴ってこの地に赴くメアリー（小説ではどちらが姉でどちらが妹なのかは明らかとはならない）、アメリカ人の彼女たちの目に映じた革命さなかのケープ・フランソワはどのように描かれているか——フランス兵、クレオール、反旗を翻した黒人兵や奴隷からなるニグロの三層に分断した社会をまず見ることにする。

1 サン＝ドマングのクレオールたち

メアリーとクレアラがケープ・フランソワでまず接することになるのは、クレオール女性たちとの社交の世界である。革命の辛苦を耐えてきたクレオール女性たちは、かつてアンティル諸島の真珠と呼ばれたサン＝ドマングでの光彩に満ちた日々——彼女たちが「庭園」と呼ぶ所領で奴隷を所有し、君主の如き富と栄華を享受した日々を懐かしむ。「洗練を極めた食事、賭博三昧、色恋の放蕩はとどまるところを知らなかった」(70)。メアリーは彼女たちのフランス的快活さとクレオールの愛らしさを賛美しつつ、その「怪物性（“a monster” [70]）を見逃さない。「官能的な倦怠」をまとうクレオール女性たちの嫉妬深さは時に恐るべき出来事を引き起こす。あるクレオール女性は Coomba という美しいニグロの少女を侍女としていたが、この少女を見る夫の目に“tendresse” (70) を見た彼女は、ある日の晩餐に食欲をそそるものを差し上げましょとこの少女の首を差し出す。その一方で、クレオールプランターと奴隷との関係はそうした残虐さのみに集約されるものではない。所有と支配、献身と依存の関係は両者の間に独特の「親密さ（intimacy）」を生み出す。Joan Dayan はアンテベラム期のアメリカの奴隷制擁護論のイデオログの言説に現れる「愛」（“love,” “attachment,” “fidelity,” “devotion”）という言葉に注目する。「そこ（主人と奴隷との関係）には白人同士の関係よりも深い親密さ（“intimacy”）が見出される。〔中略〕奴隷所有者あるいは奴隷を所有する女主人であることは快樂の極みであり、究極の所有物としての奴隷は、彼あるいは彼女のアイデンティティの必要不可欠な部分となる。〔中略〕あなたは自分が所有するものを愛するばかりではなく、自分が愛す

るものを所有するのである。〔中略〕 奴隷と主人との稀にして特別な愛は所有という絆に基づいている。それは対等な立場の二者の間には不可能な類の絆である」(191-93)。メアリーがサン＝ドマングで目撃する奴隷制度のもとでのダヤン的な主人と奴隷との関係——その所有と愛情の「親密さ」の象徴であり、かつサン＝ドマングにおけるクレオール性を示すものが、「マドラス木綿のハンカチーフ (madrass [sic] handkerchiefs)」である。メアリーは白人クレオールの女性たちの美点を賞賛しつつも、彼女たちは感情を制御できず、ヨーロッパの悪しき影響に支配され、そして何より奴隷たちを「模倣」する。元来奢侈禁止令によって絹を身につけることを禁じられ髪を覆うことを強制された“women of color”が着用したマドラス・ハンカチーフは、有色女性たちの装飾的で魅力的な巻き方により粗末さの徴であることを止め、主人である白人クレオールの女性たちが模倣するところとなっていた。サン＝ドマングでメアリーが初めてナポレオンの妹でルクラーク將軍の妻である Pauline に対面したとき、彼女はモスリンのモーニングガウンを身に纏い、頭にマドラス・ハンカチーフを巻いていた。またメアリーは、ケープ・フランソワで出会ったクレオール女性、奴隷に夫を殺され子供も失い、家も焼かれて命からがらこの地に逃れてきた彼女の悲惨に涙しつつも笑いを禁じ得ないエピソードのひとつとして、マドラス・ハンカチーフをめぐる彼女と奴隷のエピソードを記している。「何を無くしてもこのことだけは彼女を慰めるらしいのだが、彼女曰く、この奴隷は、私のマドラス・ハンカチーフを全部救ってくれたのです」(70)。メアリーの目に映じたマドラス・ハンカチーフとはサン＝ドマングの「クレオール性」の象徴であり、それは「模倣」という行為に代表される主人と奴隷との「親密さ (intimacy)」がもたらす文化的・人種的境界の流動性を意味する。³ヨーロッパとアフリカが熱帯植民地で混淆すること、両者が奇妙に入り交じること——このように捉えられるカリブの文化と人種の「クレオール性」⁴は、カリブを他者として遠ざけるイデオロギー

3 Frantz Fanon の *Peau noire, masques blancs* の第1章“Le Noir et le langage”で、マルチニックを出てフランスに向かう黒人が口にする言葉にマドラス織に触れる部分——“Adieu madras, adieu foulard” (42) がある。「マドラス織」はコロニアル・アイデンティティの重要な徴である。

4 「クレオール」という語は OED によると、スペイン語の“criollo”に由来し、こ

的操作であると同時に、後述するメアリーやクレアラの「大陸的アメリカ性」としての自己形成にとって「構成的外部 (“the constitutive outside”）」⁵として機能することになる。

メアリーは、クレオール女性たちを「官能的 (“voluptuous”）」や「楽観的 (“sanguine”）」といった言葉で形容し、「気前がよく、もてなし上手で、素敵ではあるが、空疎で、気まぐれで、真面目に物事に取り組むことができない」と断定する (70)。クレオール・フレンチと本国からサン＝ドマングを奪還

れは “native to the locality, ‘country’ ” を意味する語である。南アメリカでアメリカ生まれの黒人を “Blacks freshly imported from Africa” と区別するために使用されるようになったが、それが西インド諸島生まれのスペイン人にも用いられるようになった。従って本来クレオールという語は黒人、白人、混血 (ムラトール) と肌の色の区別なく用いられ、人種ではなく起源の土地と関わる語である。それは植民地の歴史において、生まれた場所がその人間を決定づけるという考え方に根ざしたものであり、それは 19 世紀初頭以降の人種決定論と似たような理解であったとされる (Dillon 95)。またアメリカにおいて「クレオール」という語は、人種的・文化的混合性 (“racial and cultural hybridity”) の含みがあり、起源の土地 (“geographical nativity”) の意味合いは持たない (Dillon 95)。サンセイの小説ではクレオールという語の使用はサン＝ドマングなど植民地におけるこの語の使用の慣用と異なり、クレオールは “white creoles” に限定されている。この小説では「クレオール」と言及される人々の起源の場所も曖昧である。例えば、クレアラの夫セント・ルイス (サン・ルイ) はクレオールと記されるが、サン＝ドマング生まれの白人なのか、フランス生まれでサン＝ドマングに定住しているのか判然としない。この小説における「クレオール」性の特徴は、ヨーロッパ生まれフランス人がこの地で「クレオール化」という様に (ルクラク夫人)、熱帯の地での climatologic な変容という植民地主義的イデオロギーと関わるものである。

- 5 「構成的外部 (“the constitutive outside”）」という概念については、Judith Butler による “homosexuality” および “miscegenation” が、人種とセクシュアリティの規範としての “a normative heterosexuality” を構築する「構成的外部」として機能するという論を参照 (167)。また Goudie による “constitutive double” (203) という概念も参照。

に来たフランス人との関係は敵対的である。クレオールたちにとってフランス兵は、自分たちを防衛するというより「破滅させることを狙っているよう（“appear to seek their destruction” [76]）」に思われる“oppressors”（76）である。トゥーサン・ルーヴェルチュールの時代にこの地に留まった多くのクレオールたちは変化を嘆いてトゥーサンの時代を懐かしみ、黒人に対するよりも自分たちを防護に来たはずのフランス兵の小心と強欲に怒りを募らせていた。彼らは気候のせいであらゆる気力を失い、無規律な黒人兵士（“brigands” と称される）を前に逃亡する一方で、この地から利益を収奪しようとする。

フランス人とフレンチ・クレオールに対して、今やサン＝ドマングを制圧した黒人たちは「獣のような情熱（“brutal passion” [92]）」と「情け容赦のない野蛮さ（“unrelenting savage” [131]）」が強調される。それは特にルクラク死後、彼の後継者となった Rochambeau がケープ・フランソワで Jean-Jacques Dessalines との間で不名誉な降伏文書を交わし、デサリーヌが三日間の猶予を与えた上で白人を虐殺し始めた後、一層顕著になる。デサリーヌが発布した独立文書では「白人は土着の人間（“indigenes” [original italic]）——彼らは自分たちをそう称した——の敵であり、彼らの肌の色だけで嫌悪と破壊の対象とするに十分」（121）と宣言されていた。彼ら「血に飢え殺戮に飽き足らない怪物（“monsters, thirsting after blood, and unsated with carnage”）」が今や「野蛮な主人（“savage masters”）」となったのであった（123）。

2 メアリーとクレアラの「大陸アメリカ性」

このようなサン＝ドマングの三つのグループ——弱々しいが利益追求に貪欲な本国フランス人、快楽を好み軽信なフレンチ・クレオール、「野蛮な」黒人たちとの関係のなかで、メアリーとクレアラは自分たちのアメリカ人としてのアイデンティティを構築する。彼女たちが自己形成するアメリカ性とは“continental American”と呼ぶべきものである。メアリーは自国アメリカを「大陸（“the continent”）」と呼び、「この小さな場所で囚人のように感じ」（77）故郷のフィラデルフィアへの帰還だけを願う。メアリーのいう「大陸」とはサン＝ドマングの「海と垂直に切り立った山との間の細長い土地にあるこの小さな場所」（77）との差異を際立たせる言葉である。そして彼女の「大陸」は、「今私たちがこの地で晒されている危険との対照ゆえにその平和な

安全 (“peaceful security”) が二重に貴重なものとなった幸福な国家」(92)である。メアリーの意識は常にフィラデルフィアに向いており、自分が生を受けた平和で安全な「大陸」への帰還を「熱烈に……もはや叶わぬのではないかと恐れながら願う」(121)。

メアリーの「大陸アメリカ人」としてのアイデンティティは、その後のカリブ海の島々への異なる本国をもつカリブ海植民地間の移動(ケープ・フランソワからの脱出、キューバ、そしてジャマイカへ)により一層強化される。彼女のアメリカ人としての「大陸性」は故国アメリカのカリブ海植民地の「島」に対する優位性を表象するとともに、それは人種としての白人性とも結びつくが、その白人性は彼女たちのジェンダーとセクシュアリティに対する意識によって強固なものとなる。その一方でサン＝ドマンクの黒人とアメリカの黒人との連想は表面化することなく抑圧される。

メアリーとクレアラのアメリカ性の構築において、彼女たちのジェンダーとセクシュアリティに対する意識や慣習が重要な役割を果たすが、ポーリーンに代表されるフランス女性、クレオール女性、黒人女性との差異化によってなされることは注目に値する。サン＝ドマンクにおけるポーリーンは、先に述べたマドラス・ハンカチーフの着用に見られる奴隷女性の模倣、読書を好まず歌に夢中であること、General Boyer との恋愛遊戯、またクレオール女性を形容する典型的な言葉 “voluptuous” が彼女に対して頻繁に用いられていることから、そのヨーロッパ性よりもクレオール化が顕著であることが示されている。ポーリーンのコケットリーに対し、クレアラについてもロシャンボーや Major B-- との関係など同様なコケットぶりが描かれるが、メアリーはクレアラのコケットリーは彼女の本質ではなく、「女性は人生の早い段階で稀な幸運によって自分より優れているかもしれないもしくは同等な男と結びつかない限り、優れた才能と魅力を持つ女性は時代や国を問わずコケットと呼ばれることになるのだ」(153)と述べ、夫との関係——奴隷制のアナロジーを帯びたその支配と所有の関係——のなかから構築される属性だとする。ポーリーンのコケットリーが熱帯の地でのクレオール化であるのに対し、クレアラのそれは抑圧的な結婚制度に因があるとされることでクレアラの道徳的優位性、「優しく繊細な心 (heart tender and delicate, 77)」、「感受性 (the sensibility of her heart, 79)」、「自尊心と気概 (proud and high spirited… submit to no control, 81)」は損なわれることはない。⁶ その特質はその後のサン＝ドマ

ングからキューバ、ジャマイカへというカリブ諸島の移動のなかでより強化されていく。

黒人兵の攻撃が激しくなり、メアリーとクレアラはケープ・フランソワを脱出し、キューバの最東端の地 Barracoa へと逃れる。さらにバラコアから St. Jago de Cuba に行き、その後メアリーはジャマイカのキングストーンへ、クレアラは夫の暴力もとから出奔してサンチアゴ・デ・クーバから 20 リーグ（約 100 キロ）ほど西にある Bayam に行く。姉妹は、サン＝ドマングからキューバ、キューバからジャマイカへと移動し、物語の最後キングストーンで合流し、フィラデルフィアへと帰還することになる。カリブ海の島から島への移動は、「島」に対しての姉妹の「大陸アメリカ性（continental American）」というアイデンティティを強固に確立していく。サン＝ドマング、キューバ、ジャマイカ——それぞれの地についてメアリーの観察眼は、異なる本国との関係に由来する文明度の優劣を捉えるが、カリブ海植民地の島々が互いに見せる差異とは対照的に、メアリーとクレアラの「大陸アメリカ性」の同一性は揺らぐことはない。

メアリーとクレアラは、ロシャンボー将軍のデサリーヌへの「情けない」（121）降伏文書の後、三日間の猶予の後に行われる白人住民の虐殺が起こる前にケープ・フランソワを逃れてキューバのバラコアに渡り、さらにバラコアからサンチアゴ・デ・クーバ、その後ジャマイカのキングストーンへと移動する。メアリーの目にはサンチアゴ・デ・クーバとバラコアは前者の方がサン＝ドマングからのフランス人の流入によって“a little more civilized”（111）であるが、迷信と無知が浸透し、サン＝ドマングに比べると著しい貧困の地と映る。この地の人々はやっと「野蛮な状態」から脱し始めたばかりであり、「嘘つきで、信用できず、執念深い」（119）。「彼らは自らも貧しいために苦

-
- 6 Michelle Burnham はクレアラのコケットリーに関して、小説のなかでメアリーが行うフェミニスト的解釈とは異なり、ポストコロニアル批評による分析をしている。ロシャンボー、クレオールである夫のセント・ルイス、クレアラの三角関係は、ヨーロッパ、植民地（サン＝ドマング）、アフリカの大西洋三角貿易をなぞっており、クレアラのコケットリーな肉体は、この欲動と資本主義のサーキットのなかでの“colonial exchange”として生み出されるもので、コーヒーや砂糖などの商品とのアナロジーを帯びるとする（181-83）。

境にある者を思いやる気持ちは持っている。欠乏の何たるかを知るため、客人をもてなそうともする。しかしその他の点においてこの人々は「退廃 (“degenerate”）」した人々だ。嫉妬心以外のいにしえのスペイン人の資質を何も持たず、それはしばしば悲劇を引き起こす」(119)。「この地と私が生を受けた安全で平和な国 (“peaceful security of the country”）」とは何と異なっていることだろう。もう故国に戻ることはないのだろうかと恐れつつも、国へ帰ることを私は熱烈に願っている」(121)。キューバからジャマイカのキングストンへ渡ったメアリーは、「清潔な (“an air of neatness”）」(129) この町を気に入る。こうしたカリブ海の移動によりメアリーの意識のなかで、キューバを底辺とするサン＝ドマング、ジャマイカ、そしてフィラデルフィアという空間の序列化が起こる。

メアリーとクレアラの移動の動因となるのがハイチ革命であり(サン＝ドマングからキューバへ)、クレアラの夫セント・ルイスの暴力(キューバからジャマイカへ)である。クレアラは自らの結婚生活を「心の平穏を犠牲にして買った安楽」(138)と呼ぶ。サン＝ドマングの奴隷蜂起とクレアラのCKETTリーは、それぞれ植民地支配と家父長制の所有と支配の暴力のもとで生み出されたものである。この小説が時に顕在化させる、ともに金銭で売買され所有される肉体としての女性と奴隷との近似性は、クレアラがその逃避行の最中にかつての炭鉱の町で今は“cobrero maroons”が住むCobreという村に滞在するシーンにおいてテキスト上の頂点を迎える。しかし、クレアラが見るコブレの姿は、数々の奇跡をもたらした聖母マリアを擁するピクチュアレスな寺院と、最貧困にあえぐ「ムラトール」の怠惰と惨めさでしかない。コブレを天上と煉獄のイメージで捉え、ただ観光的なまなざしのみ注ぐクレアラに、女性と奴隷の共闘と解放のヴィジョンは意識にのぼることはない。両者は互いに宗教的、人種的な他者として隔絶した領域の住人であり、コブレの地はクレアラの白人アメリカ性を強化する「構成的外部」として機能するに留まるのみである。

3 カリブからアメリカへの帰還——西部テリトリー、バーの陰謀、ジェファソンのアメリカ

夫の追跡を逃れてキングストンに到着しメアリーと再会したクレアラは抑圧的な感情から自由になり、喜びと安寧を味わう。小説の結末は、セント・

ルイスがサン＝ドマンゴの隣のスペイン領サント・ドミンゴ（彼は妻がこの地にいと追ってきていた）からフランスへ帰国したことを語り、姉妹が翌週にもフィラデルフィアに向けて出発するという知らせ、手紙の受け手であるアーロン・バーとの再会の希望、クレアラにとってバーが「友人、保護者」（154）となることへの期待の言葉で幕を閉じる。物語の末尾の「バーの友情と保護」という語は、フィラデルフィアからサン＝ドマンゴへ、サン＝ドマンゴからカリブ海植民地の島々への移動を描いたこの小説に、アメリカがルイジアナ購入によって獲得した広大な西部空間をも引き込もうとするものである。この小説が発表された1808年は、西部テリトリーに帝国を築こうとしたとして反逆罪に問われたバーはイギリスに逃れ、名誉回復に忙しかった時期である。西漸運動の到来を前にアメリカの未来と脆弱性を映し出す空間であった西部テリトリーを小説の言説の射程に入れることは、サン＝ドマンゴの奴隷蜂起と革命、カリブの島々との関係から構築される「大陸アメリカ性」というアメリカのアイデンティティを内包するこの小説の政治性とどのように関わるのであろうか。

1793年にサン＝ドマンゴの白人プランターの支配が終わり黒人がほぼ島を掌握した時、ワシントンからアダムスにいたるフェデラリスト政権はアメリカの通商の利点となり、フランスの新世界進出に打撃となるとしてハイチの独立を好意的に捉えていた。国務長官のTimothy Pickeringは「サン＝ドマンゴがフランスの植民地であるより黒人による支配が実現する方が安全である。黒人兵を従えたフランスは（カリブ海の）イギリス領を征服し、わが国の南部に脅威を与えるかもしれないからだ」と述べている（Hickey 365）。アメリカとの貿易拡大はトウサン・ルーヴェルチュールにとって軍需品の資金源となり、彼のサン＝ドマンゴ支配を安定させていた。フランスとの疑似戦争（“Quasi-War” [1798-1800年]）の最中には通商の利益を守るべく、アメリカは海軍を派遣しトウサンと敵対するBenoît Joseph Rigaudの勢力を打破する支援をしている。しかし、フェデラリスト政権下での黒人反乱軍への支援は1801年にジェファソンのリバプリアン党が政権につくと一変することになる。南部人であるジェファソンはトウサンと彼に従う兵士たちを「食人ども（“cannibals”）」と呼び、サン＝ドマンゴの黒人反乱が南部に飛び火することを恐れた（Hickey 368）。また当時スペイン領のフロリダ（East FloridaとWest Florida）の獲得をもくろむジェファソン政権は、フランスの

仲介と支援を期待しており、サン＝ドマング問題でフランスと敵対したくないという事情もあった (Hickey 374-75)。ジェファソンは 1806 年にハイチとの貿易を禁止し、デサリヌによるハイチ独立宣言 (1804 年) 後もこの黒人共和国を承認しなかった (アメリカのハイチの承認は 1862 年である)。レオノーラ・サンセイの『秘密の歴史、あるいはサン＝ドマングの恐怖』はジェファソンのこうしたハイチ政策のさなか、ジェファソン政権下の副大統領 (1801-1805 年) で、後にニューオーリンズを制圧し西部テリトリーをアメリカから分離させようとしたとして、反逆罪に問われジェファソンの命で捕らえられるアーロン・バーに向けて書かれたものである。レオノーラ・サンセイ (née Leonora Hassell または Hassall) は 1796 年にバーと知り合い、そのバーの勧めで 1800 年にサン＝ドマングにコーヒー・プランテーションを所有していたフレンチ・クレオール、Louis Sansay と結婚するものの、断続的にバーの愛人であったとされる (Drexler 28)。サンセイは、小説のクレアラと同じく夫に付き従ってサン＝ドマングに渡るが、アメリカに帰国し、1806 年に Madame D'Auvergne の名でニューオーリンズに移動し、数人のバーの同士とともにバーの到着を待ち受け、ルイジアナ購入で獲得した西部テリトリーに帝国建設を夢見たバーの計画に加担した (Lapsansky 34)。サンセイからバーへの最後の手紙は 1817 年のもので (Lapsansky 34)、その頃バーとの関係は終息したらしいが、サンセイはその後も *Zelica, the Creole* (1821 年)、*The Scarlet Handkerchief* (1823 年) などの小説を出版している。

サンセイの『秘密の歴史』に現れたジェンダーや人種、そしてセクシュアリティに纏わるイデオロギーは、アメリカの白人女性を、サン＝ドマングのフランス人やフレンチ・クレオール、ムラトールから遠ざけ、両者の間に境界を設けるもので、白人と黒人の混血 (miscegenation) を忌避するエピソードに満ちている (クレアラとクレオールの夫との決別や、サン＝ドマングの黒人男性と白人女性の性的結びつきのタブー視などにそうしたテキストのイデオロギー性がうかがえる)。サンセイの「大陸アメリカ人」の白人優位性は、カリブ海地域の移動というプロットにも関わらず、アメリカとカリブ海地域との間に連続性をもたらすものではなく両者を切り離すものである。その意味では、ハイチ革命に触発されてバーが計画していたとされる革命煽動によるメキシコの独立というヴィジョンよりは、バーが敵対したジェファソンが思い描いていた「ピュアな」白人国家アメリカの構築の場としての西部テリ

トリーの構想に近いと思われる。⁷それは「コロンビア」のアメリカと「クレオール」の西インド諸島の女性との隔絶である (Goudie 202)。

サンセイの『秘密の歴史』は、19世紀初頭のアメリカが白人国家という人種イデオロギーを胚胎しつつ大陸としてのアイデンティティを構築するにあたり、サン＝ドマングおよびカリブ海地域が「構成的外部」として果たした役割を垣間見せる。フェデラリスト政権のサン＝ドマングの黒人支援の政策に取って代わったジェファソン政権が方向転換をすることで、アメリカは半世紀以上にわたってハイチの黒人共和国に敵対的な姿勢を取ることになる。その間、Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1852年) のなかで “an African nationality” を希求する George が “the Haytiens … a worn-out, effeminate one … the subject race” (440) とハイチを唾棄するように、アンテベラム期のアメリカにおいてハイチの黒人革命の成功と黒人共和国の誕生は抑圧・忘却され、人種や文化が混淆するこのクレオールの地にはアメリカにとって棄却すべきイメージや記号が沈殿するようになる。ハイチそして西インド諸島を他者として棄却するアメリカの「クレオールの無意識」こそは、サンセイの小説のタイトル『秘密の歴史』が指し示す、秘されたものなのかもしれない。

Works Cited

- Burnham, Michelle. “Female Bodies and Capitalist Drive: Leonora Sansay’s *Secret History* in Transatlantic Context.” *Legacy* 28. 2 (2011): 177-204. Print.
- Butler, Judith. *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of “Sex”*. New York: Routledge, 1993. Print.
- Dayan, Joan. *Haiti, History, and the Gods*. 1995; Berkeley: U. of California P, 1998. Print.
- Dillon, Elizabeth Maddock. “The Secret History of the Early American Novel: Leonora Sansay and Revolution in Saint Domingue.” *Novel* 40 (2006-2007): 77-103. Print.

7 Jefferson のピュアな白人ネイションという国家観については、Dayan 188-89 を参照。

- Drexler, Michael J. "Introduction." *Secret History; Or, The Horrors of St. Domingo and Laura*. Ed. Michael J. Drexler. Ontario: Broadview, 2007. 10-37. Print.
- Fanon, Frantz. *Peau noire, masques blancs*. Seuil, 1952; rééd. Seuil, coll. Point/Essais, 1971. Print.
- . *Black Skin, White Masks*. Trans. Richard Philcox. 1952; New York: Grove Press, 2008. Print.
- Goudie, Sean X. *Creole America: The West Indies and the Formation of Literature and Culture in the New Republic*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2006. Print.
- Hickey, Donald R. "America's Response to the Slave Revolt in Haiti, 1791-1806." *Journal of the Early Republic* 2 (1982): 361-79. Print.
- Lapsansky, Phillip S. "Afro-Americana: Rediscovering Leonora Sansay." *The Annual Report of Philadelphia for the Year 1992*. Philadelphia: The Library Company of Philadelphia, 1993. 29-46. Print.
- Liu, Tessie P. "The Secret Beyond White Patriarchal Power: Race, Gender, and Freedom in the Last Days of Colonial Saint-Domingue," *French Historical Studies* 33.3 (2010): 387-416. Print.
- Rosaldo, Renato. *Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis*. Boston: Beacon Press, 1989. Print.
- Sansay, Leonora. *Secret History; Or, The Horrors of St. Domingo and Laura*. Ed. Michael J. Drexler. Ontario: Broadview, 2007. Print.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin*. Ed and Introduction. Jean Fagan Yellin. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.